観念論と唯物論

――影山秀夫氏のチュチェ思想批判について――

井上周八

はじめに
一　チュチェ思想とマルクス・レーニン主義の関連についての影山氏の批判とその検討
二　哲学的原理に対する影山氏の批判とその検討
三　人間の本質についての影山氏の批判とその検討

はじめに

論文「チュチェ思想における哲学と思想の問題」（雑誌『科学と思想』五九号、新日本出版社、一九八六年一月）において影山秀夫氏はチュチェ思想批判を展開した。氏の論文の構成は次の通りである。

一　チュチェ思想をめぐる今日の日本の状況
二　チュチェ思想の一般的な特徴
三　チュチェ思想とその哲学的な問題

(1) 新しい時代における新しい「永生不滅」のチュチェ思想
(2) チュチェ思想と哲学の根本問題
(3) 人間中心の世界観
　① 人間の規定
　② 世界唯一の支配者としての人間
　③ 決定的な役割をはたす意識性
(4) チュチェ史観
　① チュチェ史観における新たな「発見」
　② チュチェ史観の基本内容
(5) チュチェ思想の主観主義の重大な帰結

四　結　び

影山論文は学者からのまとまったチュチェ思想批判としては、日本で筆者の目にとまった最初の論稿であり、いろいろな意味で参考になった。そこで以下、氏がチュチェ思想に対して提起された批判について検討しよう。

氏のチュチェ思想批判の論点は、その小見出しをみてわかるように、多くの点にわたっているが、ごく大雑把にいえば次のようなものである。

チュチェ思想の信奉者、盲従分子は、マルクス主義は今日ではすでに古くなっており、チュチェ思想はこれに代わる全く新しい「前人未到」の「完璧な思想」であると主張しているが、チュチェ思想は観念論にすぎない。チュチェ

思想の人間規定も抽象的、超歴史的な規定であり、チュチェ思想の哲学的原理にも疑問がある。さらにチュチェ思想は社会・歴史観においても何ら発展していない。そのうえチュチェ思想を唯一の思想としている点は民主主義の基本原則の否定であり、金日成主席を絶対視して、主席を人民大衆のうえに君臨させている点も、個人崇拝を人民に強制するものである。

ほぼこのような批判的見解のもとに氏の理論は展開されているが、氏のチュチェ思想批判の論点を私は次の八項目にまとめてみた。

(1) チュチェ思想とマルクス・レーニン主義の関連について。チュチェ思想はマルクス・レーニン主義をどうみているか。
(2) チュチェ思想の哲学的原理について。
(3) チュチェ思想の人間観について。
(4) チュチェ思想の社会・歴史観について。
(5) 思想・意識の役割について。
(6) チュチェ思想における「支配・奉仕のシェーマ」について。
(7) 唯一思想体系であるという点について。
(8) 結局、チュチェ思想は観念論であり、金日成主席は人民に君臨し、個人崇拝されているという点について。

そこで以下、右の順序にしたがって影山氏の所説を検討しよう。

一　チュチェ思想とマルクス・レーニン主義の関連についての影山氏の批判とその検討

影山秀夫氏は右の点について以下のように述べている。

「チュチェ思想は、新しい時代の新しい思想（新しい哲学）、チュチェ時代のチュチェ思想、といわれ、これは、すでに古くなったマルクス主義、科学的社会主義、唯物史観にかわるまったく新たな思想して提唱されているのである。」（一七二―三ページ）

「このようにして、『チュチェ思想は自主性にもとづいて前進する国際共産主義運動の新しい道、国際関係発展の新しい時代を開』いたとされる。すなわち、『チュチェ思想によって労働者階級の革命的世界観は新たな高い段階へと発展し完成され』た、それは『永久に勝利しつづける不滅の共産主義革命理論』であり『前人未到の新しい道』である、とされる。マルクス主義、レーニン主義はすでに古い時代の思想となったのであり、今日は、それにかわって、チュチェ思想、すなわちこれを真髄とする金日成主義こそが新しい時代のもっとも正しい世界観であるとされるのである。」（一七四―五ページ）

そして、氏はチュチェ思想はマルクス主義を「前提」にしていると言っているが、マルクス主義とは別の思想であるとして、次のように述べる。

「ともあれ、チュチェ思想の場合には、『前提』という語の多義性によりながら、科学的社会主義の哲学とは異なる、新しい時代の『新しい哲学』、すなわち一九三〇年に卡倫会議で金日成が創始し提示した新しい時代の新しい哲学が、『前人未到』『永生不滅』の哲学としてうち出されるのである。前出（「朝鮮新報」一九七四年八月）の『金日成主

義』には、このようにして、次のように書かれるのである。『偉大な金日成主義は、チュチェ時代を代表する独創的な革命思想』であり、それは、弁証法的唯物論ではないと明言される。『偉大な金日成主義は、弁証法的唯物論ではなく、人類思想史において初めて発見されたチュチェ思想を根本的な土台とする不滅の思想理論であり、この独創的な革命思想の全般の体系は、チュチェ思想の基礎の上に成り立っているのである』、『偉大な金日成主義は、先行の労働階級の思想理論とはちがって、物質中心ではなく、徹底して人間を中心にして考え、革命と建設において人民大衆の役割を高める見地からあらゆる問題を解明している』。」（一七八ページ）

そして氏は次のように結論づける。

「科学的社会主義とその哲学についての誤解というか曲解というか、それにたいする不当な貶下。要するに、これを古い時代の古くなった思想・哲学とみなし、これに代わるものとして、新しい時代の新しい思想・哲学として、チュチェ思想、チュチェ史観が提唱される。しかし、『永生不滅』とか『前人未到』とかの根拠を欠いた、説得力のない、極端な独自性、独創性の自己主張に終わっている。」（一八九ページ）

以上のように影山氏はチュチェ思想がマルクス・レーニン主義を低くみ、古くなった過去の思想であるとしていると批判するのであるが、この批判は全くの曲解である。

もともとマルクス・レーニン主義者を自認する人は、マルクス・レーニン主義こそが人間解放のための一番正しい思想であり、人民大衆が依拠して生きるべき思想であると思っているし、私もそう確信している。そして現在の社会主義朝鮮についての理解に乏しいマルクス・レーニン主義者たちは――私もそうだったのであるが――、チュチェ思想がマルクス・レーニン主義を継承し、それを創造的に発展させた新しい哲学であるとは予想することもできないの

も無理からぬことである。しかしチュチェ思想を真剣に学ぶなら、この思想こそマルクス・レーニン主義を受け継ぎながらも、それを現代の要請に応えて新しい段階へと発展させた学説であることがわかろう。

金日成主席が「マルクス・レーニン主義的チュチェ思想」と述べているように、影山氏の所説とは反対に、チュチェ思想とマルクス・レーニン主義は深い関係をもっており、チュチェ思想はマルクス・レーニン主義を継承していると同時に、マルクス・レーニン主義を朝鮮の現実に創造的に適用して、独創的に発展させた新しい思想なのである。

一般的にいって、すべての新しい思想は、何もないところから生まれるものだろうか。マルクス主義もそうであったように、新しい思想はそれ以前のすぐれた思想的成果を継承発展させたものである。その際、新しい思想は、それ以前の思想と必ず共通の側面をもつものである。もし、このような共通性がなければ、新旧両思想の間に継承性などありえない。しかし、継承性のみがあって独創性がなければ、およそ思想の進歩、発展などという言葉は無意味であろう。

ある思想が先行思想の正しい継承に基づく独創的な思想でなければ、それは以前の思想とくらべて新しい思想とはいえず、したがって新しい時代の要請に応えることはできない。

主席はマルクス・レーニン主義者として朝鮮革命の道を開拓し、新しい時代の要請に応えてマルクス・レーニン主義の普遍的真理を朝鮮の現実に創造的に適用する過程でチュチェ思想を創始し発展させて今日の第三世界の模範国といわれる社会主義朝鮮を建設したのである。(注)

(注)　チュチェ思想はどのような歴史的背景のもとで、どのような目的で創始されたのであろうか。

チュチェ思想は、まず何よりも日本帝国主義の支配下にあった朝鮮人民を解放することを目的とした朝鮮革命を遂行すると

いう切実な要求から生み出された革命思想であり、朝鮮革命を遂行する過程で創始・発展された革命思想である。

金正日書記はチュチェ思想が金日成主席によって創始された事情を次のように述べている。

「主席は、抑圧されさげすまれた人民大衆が自己の運命の主人として登場した新しい時代の要請を深く洞察して、偉大な主体思想を創始することにより、自主性をめざす人民大衆の闘争を新たな段階に発展させ、人類史発展の新しい時代、主体時代を開拓しました。

労働者階級の革命思想は、歴史と革命発展の機の熟した要請を反映して発生します。

主席が革命に身を投じた頃、労働者階級と人民大衆の抑圧と搾取に反対する闘争には新たな転換が生じていました。世界で初めて勝利した社会主義の影響力が強まり、労働者階級の革命闘争と植民地および半植民地諸国人民の解放闘争が急速にもりあがっていました。帝国主義者は人民大衆の革命的進出を阻み、直面した深刻な政治的・経済的危機を免れようと、人民にたいする略奪と弾圧を強化しました。多くの国で革命と反革命間の矛盾と対立が激化し、長いあいだ自主権をじゅうりんされてきた人民大衆が階級的・民族的解放をめざす闘争に立ち上がりました。こうして、革命運動が世界的規模で幅広く、多様性をおびて発展する新しい時代が到来しました。

新しい歴史的条件のもとで革命を前進させるためには、各国の労働者階級と人民が主人としての自覚をもち、すべての問題をそれぞれの実情に即して解決していかなければなりませんでした。わが国では歴史発展の特殊性と革命の複雑さ、多難さから、この問題はとくに重要な問題となりました。朝鮮革命は、人民大衆が自主的に、創造的に革命の前途を切り開くことをいっそう切実に求めました。

主体思想は朝鮮革命のこうした実践的要請にもとづいて創始されました。」(『チュチェ思想について』)

チュチェ思想創始には二つの原点がある。すなわち金正日書記論文『チュチェ思想について』で指摘した次の二点である。

第一点は、朝鮮における初期共産主義運動、民族解放運動の実態を主席が深く洞察して、当時の運動家が革命にとって一番大切なこと、人民の中に入って人民を教育、組織化し、革命闘争に団結して立ち上がらせる方向に進むことを放棄し、大衆から遊離し、指導権争いと議論にばかりふけり、派閥闘争をこととし、運動を分裂させるという致命的な欠陥におちいっているのを見抜き、これらとは異なる正しい路線、すなわち、革命運動の主体は人民大衆であり、人民大衆の中に入って人民を教育し、人民を一つに団結させ、組織動員してこそ革命は勝利するという、大衆に依拠して闘う真の革命の道を明確にしたこと、

第二点は、主席が、当時の朝鮮におよぼした事大主義、すなわち、大きい国や発展した国を崇拝する奴隷的屈従思想であり、自国や自己の民族を低く見、蔑視する民族虚無主義思想である事大主義と、前提や現実を分析せず、観念的に古典の命題をうのみにする教条主義の害毒から深刻な教訓を汲みとり、革命は誰かの承認や指図によってではなく、自身の信念によって、自分が責任をもって行い、革命で提起されるすべての問題を、自主的に創造的に解決しなければならないという真理を明らかにしたこと、以上の二点である。

チュチェ思想は、人民への限りない献身者である金日成主席によって、右の二つの原点から出発して創始されたのである。主席は、反帝反封建民主主義革命と社会主義革命、社会主義・共産主義建設をはじめとする各段階の革命闘争と政治、経済、文化、軍事など各分野の活動を勝利に導く過程で豊富で貴い経験を積み、これを一般化してチュチェ思想を発展させたのであり、その根本原理を革命において表現するなら、各国の人民は革命の主人であるということである。

革命において各国の労働者階級と人民が主人としての自覚をもって立ち上がること、つまり革命においてチュチェを打ち立てるということは、すべての国の革命における普遍的法則である。それぞれの国の革命の主人は、その国の人民自身であり、革命は輸出することも輸入することもできないものであり、また、どこかほかの国の人が来て、その国の革命をやってくれるというわけのものでもない。帝国主義者たちは「革命輸出論」を騒ぎ立てるが、これは革命の発展法則を知らない、不当なでっち上げである。

もちろん革命と建設を進めるにあたっては、国際主義にもとづくところの外部の援助もまた重要であるが、しかし革命と建設は何よりも一つの社会としての国家が単位となっておこなわれ、各国は自力で革命と建設をおこなわれなければならないのが現実である。このため革命はその国の人民自身の力によって遂行されなければならない。

現実においてマルクス主義を正く継承すると同時に、マルクス主義を独創的に発展させることは容易なことではなく、ましてやマルクス主義を原理的に、かつ独創的に発展させることは、ただ偉大な革命的思想家によってのみ可能なことといえよう。

チュチェ思想が独創的な思想・理論体系として完成されているということは、それが科学的で革命的な世界観が具備しなければならない思想、理論、方法の全一体系として構成されているということを意味する。

チュチェ思想は、その内容をみればわかるように、正しい人間の本質規定と、人間中心の哲学的原理、チュチェの社会・歴

史観および革命運動のうえで堅持すべき指導原則から成っており、しかもそれらが全一的な思想・理論として体系化されている独創的な哲学である。もちろんマルクス・レーニン主義もそうであるように、チュチェ思想も教条ではない以上、今後ますます豊富化され、深化され、発展するものであり、さらにチュチェ思想が生きた思想である以上、これからも学問と実践の分野で具現され、その内容をますます豊富化するものであることはいうまでもない。

チュチェ思想は影山氏の主張とは反対に何よりもまずマルクス・レーニン主義に固く結びついている。

主席は次のように述べている。

「チュチェ思想とは一口に言って、革命建設の主人は人民大衆であり、革命と建設をおし進める力もまた人民大衆にあるという思想であります。言いかえれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力もやはり自分自身にあるという思想であります。**こうした思想は、決してわれわれがはじめて発見したものでありません。マルクス・レーニン主義者であれば、だれでもこう考えています。**ただわたしは、こうした思想を特別に強調しただけです。……わたしは、祖国の自由と独立をめざしてたたかう過程で、自己の運命は自らの手で切り開かなければならず、また切り開くことができるという確固とした信念をもつようになりました。」(一九七二年九月一七日「日本『毎日新聞』記者の質問に対する回答」、ゴチは井上)

主席がここでチュチェ思想は人間がすべてのものの主人でありすべてのことを決定するという哲学的原理にもとづいているが、こうした思想は決してわれわれがはじめて発見したものではなくて、マルクス・レーニン主義者なら誰でもそう考えているのであると述べていることのなかにも、チュチェ思想とマルクス・レーニン主義の結びつきをみることができるであろう。

主席はその革命の途をマルクス主義の革命的世界観を確立することから始めているが、そのことを次のように述べている。

「わたしの革命的世界観の形成において、革命的書籍は非常に大きな作用をしました。わたしは幼ないときから本をたくさん読みました。とくに、革命をやらなければならないという決心をかためてからは、革命闘争の方法を見つけ出すため、マルクス・レーニン主義の書籍をはじめ、いろいろな政治書籍や革命的な文芸書籍をもっと多く読みました。わたしは、中学のときに、『共産党宣言』や『資本論』『剰余価値学説史』などのマルクス・レーニン主義古典を読みました。」（「教育と文学・芸術は、人びとの革命的世界観の確立に貢献すべきである」、一九七〇年二月一七日）

主席が確固としたマルクス主義者として革命の途を歩み始めたことは、主席が人民大衆に依拠して日本侵略者を打倒し、朝鮮の解放をかちとるためには、まず何よりもマルクス・レーニン主義党を建設しなければならないとしたことのなかにも明白に示されている。すなわち革命の主人は人民大衆であり、革命はあくまでも自国人民の力で、自国の実情に即して、自主的に行わなければならないという理念を基本として主席は一九三〇年六月三〇日、「朝鮮革命の進路」という報告を卡倫で開かれた「共青および反帝青年同盟の幹部会議」で行い、「朝鮮革命を勝利に導くためには、革命の参謀部であるマルクス・レーニン主義党をもたなければなりません。革命的な党がなければ、正しい路線と戦略・戦術を立て、広範な大衆を日本帝国主義を打倒するたたかいに奮い起こすことも、社会主義・共産主義社会を建設することもできません」（『金日成著作集』第一巻一〇ページ）と述べ、当時の党建設問題と関連する分派分子の誤った事大主義を批判し、「これまでの経験は、革命を勝利に導くためには人民大衆のなかに入って大衆を立ち上がらせ、革命で提起されるすべての問題を他人に依存して解決するのではなく、自分自身が責任をもって、自国の実情

に即して自主的に解決しなければならないことを示しています」（同上六ページ）と徹底した大衆路線と自主性を強調している。

このように金日成主席は朝鮮を日本帝国主義の圧制から解放し、働く者がみな、すべて等しく倖せになれる理想社会の実現を目指し、マルクス・レーニン主義者として朝鮮革命の途を歩み始めたのである。

以上の指摘からでもわかるように、主席はマルクス・レーニン主義者、共産主義者として革命の途を歩み出し、したがって主席が創始したチュチェ思想が、マルクス・レーニン主義と無縁ではなく、ましてこれを古い無用の思想であるなどとみていないばかりでなく、まさにマルクス・レーニン主義の継承であることは明白である。このことは、金正日書記がマルクス生誕一〇〇周年にあたって発表した論文「マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く挙げて進もう」のなかにも確固と示されている。

ではチュチェ思想とマルクス・レーニン主義の一致点、共通性の第一は何であろうか。

マルクス主義とチュチェ思想の重要な一致点の第一は、本誌前号の拙稿で指摘したようにマルクス主義も労働者階級の思想であって、この二つの思想はともに共産主義社会の実現を目的としているということである。それゆえにチュチェ思想とマルクス主義とは同じ階級的基礎に立ち、同じ目標をもつものである。

そもそも革命思想間の継承性とは何であろうか。それは新しい思想が先行思想とその階級的理念と使命において共通性をもっているということにほかならない。革命は一つの世代で終わるのではなく、歴史の幾つかの世代を経て遂行される。革命は継承性をもたなければならず、革命思想も継承性をもたなければならない。

チュチェ思想は、マルクス・レーニン主義が達成した思想的・理論的業績が朝鮮において擁護され具現される過程

で創始され発展させられた思想であり、革命の大業に奉仕する階級的理念と使命をマルクス主義から継承しているのである。

マルクス主義とチュチェ思想の一致点の第二は、マルクス主義も唯物弁証法を基礎としており、チュチェ思想もマルクスの唯物弁証法を継承していることである。

チュチェ思想はマルクス・レーニン主義と同じく、観念論と形而上学のさまざまな潮流に反対し、唯物論的で弁証法的な立場を確固として継承している。

観念論者はいろいろな見解を並べているが、しかし究極的には何らかの観念・精神が世界を創り出した本源的なものであり、世界は神とかその他の何らかの観念・精神によって創造された、と非科学的に主張した。これに対して唯物論者は、人間の意識や思惟の役割をもちろん認め、それに大きな意義を与えるのではあるが、しかし世界は物質から成り立ち、人間の意識も人間という物質の属性であり、物質こそが本源的なものである、と科学に立脚して主張した。

唯物論を弁証法的に確立してその世界観の基礎に据えたのはマルクスとエンゲルスであった。マルクス主義の哲学である弁証法的唯物論の特徴をあらためていうならば次の諸点にある。

世界は物質から成り立っており、世界のあらゆる事物・現象は運動している物質の種々の形態であり、世界は物質の運動法則に従って変化し発展する。すなわち唯物弁証法は、自然（物質、存在、世界と言っても同じ）を互いに切り離され、互いに孤立し、互いに独立した物や現象の偶然的な集積とはみないで、物質は互いに依存し合い、互いに条件づけ合って、一つの統一ある全体を形づくっている、とみる。それゆえ自然、物質、存在、世界のどのような事物・

現象も、それらを周囲の事物・現象と関連させないで、それだけを孤立させて取り上げるならば、それらを正しく理解することはできない、とみる。

また唯物弁証法は、自然を静止したもの、動かないもの、停滞したもの、変わらないもの、とはみないで、絶えず運動し変化しているもの、絶えず新しくなり、発展しているもの、とみる。したがって自然でも社会でも、常にあるものが発生し発展しており、常にあるものが破壊されて他のものに転化しつつある、とみる。唯物弁証法にとって何よりも重要なものは、一定の瞬間に永続的にみえても、すでに滅亡し始めている事物の否定的側面ではなく、一定の瞬間に永続的にはみえなくても、発生し発展しつつある事物の肯定的側面である。

また弁証法的唯物論は、事物の発展過程は同じことの単純な繰り返しではなく、前進運動であり、上向線に沿って行われる運動であり、古い質的状態から新しい質的状態への移行であり、単純なものから複雑なものへの、低いものから高いものへの発展であり、そして、これらすべての事物の発展は、それらの事物のもつ矛盾による、とみる。すなわちすべての事物にはそれぞれに内在する固有な矛盾があって、この固有な矛盾がそのものを発展させる原動力であり、そのものがどんな形態をとって発展するかをきめる、とみる。

以上のように、マルクス主義は物質を本源的とみ、この物質世界は固定不変のものではなく、絶えず変化・発展しているものであり、また事物の変化・発展は質的変化を伴わない循環的運動の単なる繰り返しではなく、弁証法的に発展するものである、として、観念的形而上学をしりぞけたのである。

マルクスは『資本論』で商品に内在するところの価値と使用価値の矛盾の展開として貨幣の必然性を解明し、また『資本論』全巻で意識的にヘーゲルの弁証法を適用して、資本主義社会という発展した自然、「第二の自然」に内在

する弁証法を科学的に解明した。マルクスの『資本論』は弁証法の教科書であるといわれる所以である。またエンゲルスも『自然弁証法』と『反デューリング論』などで世界の弁証法的性格を明らかにし、弁証法を唯物論の立場から解明した。これはヘーゲルの観念の弁証法を文字通りひっくり返したものである。

さらにマルクスはその唯物弁証法を歴史に適用して唯物史観を確立し、生産力と生産関係の矛盾によって社会は発展すると説明した。そればかりでなくマルクスは、階級闘争を重視し、プロレタリアートの解放が人間一般の解放であるとして「万国の労働者団結せよ」と社会の変革を呼びかけたのである。したがって周知のようにマルクス主義は人間解放のための実践哲学であり、革命理論である。しかしそれは教条化されてはならない。このことはマルクス・レーニン主義そのものが教えているところである。それゆえ、各国の革命の指導者は、それぞれマルクス・レーニン主義の普遍的真理を自国の具体的実状に即して創造的に適用発展させなければ、革命を成功させることは決してできるものではない。何よりも正しい思想で人民を結集し、立上らせるためには、各国に適応したマルクス・レーニン主義が必要なのであって、教条的なマルクス・レーニン主義はそもそもマルクス・レーニン主義に反するものである。

さて以上で、チュチェ思想がマルクス主義の継承である点について述べたのであるが、ではマルクス主義とチュチェ思想が継承関係にありながらも持っているところの独創的差異、別言すればチュチェ思想の独創性はどこに求められるのか。

チュチェ思想の独創性は何よりもその根本原理に示されている。

世界にはいろいろの哲学、世界観があるが、それらの哲学、世界観はそれぞれにその哲学的原理をもっている。そして、ある哲学が何を根本問題としていて、その根本問題にどう答えたかが、その哲学の性格と内容を規定する。

チュチェ思想がマルクス・レーニン主義との関係で継承性をもっているのは、それが上述のように理念と使命と哲学的立場において共通性をもっているからである。しかしチュチェ思想はその哲学的原理と人間観を特別に強調することによってマルクス・レーニン主義と区別される独創性をもっている。

私たちはチュチェ思想を学ぶにあたってチュチェ思想が、マルクス主義をどのように継承し、それをどのように独創的に発展させたかを正しく理解しなくてはならない。

チュチェ思想とマルクス・レーニン主義との関係は、継承性を無視して、独善的に独創性の見地でのみ見てはならない。しかし、逆に独創性をないがしろにし、継承性を強調しすぎてもならない。このように継承性と独創性をみなければならないのであるが、この二つのどちらを基本としてみるかといえばそれはあくまでも独創性である。なぜなら独創性を理解しなければチュチェ思想そのものを理解できないからである。

ではチュチェ思想の独創性としてまず挙げねばならぬことは何であろうか。私はそれはチュチェ思想の哲学的原理であると考える。

ところが、ほかならぬこのチュチェ思想の哲学的原理に対して、影山論文は以下でみるような批判を加えるのである。

二　哲学的原理に対する影山氏の批判とその検討

氏のチュチェ思想批判で問題にしなければならない第二の点は、チュチェ思想の哲学的原理に対する批判である。氏は次のようにいう。

「それでは、チュチェ思想はどういう哲学的原理を掲げるのであろうか。一言でいえば、『人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理』とある。そして『人間があらゆるものの主人である』とは『人間が世界と自己の運命の主人であることを意味し』、『人間がすべてを決定する』とは『人間が世界を改造し自己の運命を切り開くうえで決定的な役割を果たすことを意味』する。それゆえ、『チュチェ思想の哲学的原理は、世界における人間の地位と役割を解明した人間本位の哲学的原理である』ということができる（『主体思想について』）。

チュチェ思想はこうして、人間を中心にすえることによって、新規に哲学の根本問題を提出するのである。科学的社会主義の哲学において、哲学の根本問題は意識と物質との第一次性にかんする問題と考えられ、この問題にどう答えるかによって唯物論と観念論という二つの根本的に異なる哲学的路線が分かれるとされるが、チュチェ思想においては、この問題は第二次的、非根本的なものにひきさげられる。金正日は次のように書く。『以前には、物質と意識、存在と思惟の関係を哲学の根本問題とみなしてきました。物質と存在を本源的とみなすマルクス主義の唯物論原理は、この問題に科学的解釈を与えました』。しかし、時代は発展し、世界観は発展する。新しい時代の世界観が要求され、チュチェ思想が創造される。『チュチェ思想は、世界の始源にかんする問題が唯物論的に解明された前提に立って、世界における人間の地位と役割にかんする問題を哲学の根本問題として新たに提起し、世界の主人が誰であるかという問題に解答を与えました』。この文章で、『世界の始源にかんする問題』とあるのは、科学的社会主義における哲学の根本問題をさしているといえよう。そしてこの問題の唯物論的な解明を『前提』として、その上にチュチェ思想における哲学の根本問題はたてられている、とされている。しかしじつはここでは、新しい時代の要求にこたえるものとして、科学的社会主義の哲学における根本問題にかわって、別に新たな『哲学の根本問題』がすえられるの

である。チュチェの哲学思想が科学的社会主義の哲学と異なる『新しい哲学』と銘うたれるゆえんである」(一七五―六ページ)

そして氏は岩崎允胤氏を引用して次のように言う。

「わたくしは、哲学の根本問題についての唯物論的な解明を、現代唯物論哲学(弁証法的および史的唯物論)の『根本前提』と考える点では、岩崎允胤氏の次の見解に資成である。氏は、物質の哲学的概念を唯物論哲学のもっとも基礎的な概念であるとし、次のように書いている。『物質という概念は……意識にたいして第一次的という意味で意識概念とは相関的であるが、他のすべての哲学的諸概念、諸カテゴリーにたいして、したがってまた当然、実践の概念にたいしても、体系的な原理として前提されるものでなければならない。物質の哲学的概念は唯物論哲学の全展開にたいする根本原理として、そのなかで貫徹されるものでなければならない』(『現代唯物論とその歴史的伝統』一九七三年)。この意味で、哲学の根本問題にたいする唯物論的な解明は、どこまでも、体系的展開の『根本前提』でなければならない。なぜなら、それは唯物論の哲学的見地の基本原則をうちたてるものだからである(念のためにいえば、ここで『体系的展開』というのは、原理からの演繹的展開という意味ではない)。

しかし、科学的社会主義の哲学における根本問題にたいするチュチェ思想の態度は、これとは異なっている。ここでは、哲学の根本問題にたいするすりかえがおこなわれ、しかもなお、従来からの根本問題にたいする唯物論的な解答を『前提』するというのである。ここでは、従来からの解答は、全哲学の展開にたいして貫徹されるべき根本前提ではなくなっている。その点で、なるほど従来からの唯物論的な解答は『前提』とはいわれるが、じつは前提(『根本前提』)ではなくなっているのである。『前提』という語はここで多義的であり、その多義性によって異なる方向での

転用への道が開ける。唯物論的な解答を『前提』とはしながら、根本的により高いと称する新たな原理が思想体系の前提として別にたてられることになる。このようにして『前提』は、じつはこれを無視してゆくための隠れのみともなりうるのである。」（一七六―七ページ）

以上のように批判を加えた影山氏はさらにアナツ・バンドゥ・デ氏の見解を取り上げて次のように述べている。

「この問題にかんするチュチェ思想の立場を説明するものとして、インド・カルカッタ総合大学教授、アナツ・バンドゥ・デ氏の見解をみよう。氏は「チュチェ思想と哲学の根本問題」（『チュチェ思想研究』一九八三年四号）で書く。『物質と意識の関係問題の解明のみでは、人間の運命問題にかんする適確な解答がもたらされない。……〔このような〕関係問題によっては、人間が自己の運命の主体として世界と結ぶ関係問題の設立が不可能なのである』。今日新たに出てきた後者の関係問題とは、主体である人間と客体である世界との問題であるとされる。『人間の運命を中心にすえて哲学の根本問題を新たに提起、解明することが、現時代の緊切な哲学的課題となった』のであり、いま根本的なことは、『主人は客観世界ではなくて人間自身である』、ということである。物質と意識、世界の客観性などの問題は根本的なことではない。『チュチェ哲学の根本問題は、人間中心の科学的かつ革命的な世界観を確立しうるように設定された哲学の根本問題である』。このようにして、チュチェを中心とする主体客体の関係問題（外的な客観世界にたいする人間主体の関係の問題）が根本的なものとして設定されるのである。」（一七七ページ）

マルクス主義が提起した哲学の根本問題は、すでに指摘したように物質と意識、存在と思惟の関係についての問題であった。そしてマルクス主義は物質の本源性を認め、世界は人間の意識や思惟によって生み出されたものではなく、それ自体が客観的に存在し運動する物質であるとした。

チュチェ思想はこのマルクスの唯物論を継承したうえで、アナツ・バンドウ・デ教授が述べているようにさらに世界の主人は人間であり、世界を改造する力も人間にあること、言いかえれば世界における人間の地位と役割に関する新しい哲学的原理を明らかにすることによって、今日の物質世界の変化発展が人類の出現によって全く新しい段階に到達したことを明確にし、世界と人間の関係についての科学的解答を与えたのである。

世界の変化発展は何に起因するかという問題をめぐり、既述のように観念論者は世界の運動発展が「神」や「絶対精神」によるとしたし、唯物論者は物質自体の内的要因によるものとした。

チュチェ思想は、物質世界の運動の原因が唯物弁証法的に解明されたことを前提としたうえで、最も高い運動形態である主体としての人間の運動を中心に据えて、世界発展過程を解明する。人間は物質世界で最も発達した存在である。人間の運動は最も高い形態の運動として、低い形態の運動を自己のなかに包含している。すなわち人間は最も高い発展段階にある物質的存在であり、無生物や他の生物にない発達した特性をもっているだけでなく、より低い発展段階にある物質である無生物や生物の特性もすべて兼ねそなえている。このような意味で物質世界の発展は人間に集約されており、人間の発達程度が物質世界の発展水準を代表している。言いかえれば、社会的存在である人間がどれほど有力な存在に発達したかということによって、物質世界発展の最高峰がどれほどの水準に到達したかをみることができるのである。

人間の運動は社会的であるが、人間の行う運動には生物的、物理的、化学的、力学的運動のすべてが含まれている。それだけではなく、人間は自己の生存と発展のため他の存在の運動をも利用する。したがって哲学は、このような主人として、改造者としての人間を中心に据えて展開されてこそ、はじめて現代の哲学たりうるのである。私たち

は主体としての人間の運動を中心に据え、それとの関係から諸々の運動形態を把握してこそ、多様な物質の運動法則を正しくとらえることができるばかりでなく、現実に起こっている世界発展の根本的特徴をも理解することができるのである。影山論文にはこの点についての理解が欠如しており、ただ哲学的範疇としての物質のもつ意義重要さを強調するに止まっている。

人間の発生は、物質の発展史上、根本的な転換をもたらした画期的な出来事である。

人間は最も発展した、世界で特殊な地位を占めている物質である。人間という生命物質の発生によって、この物質世界に、はじめて自己の存在の独自性をもって主人の地位に立ち、他のあらゆる物質的存在を自分に服従させる特殊な物質が生まれ、このことによって世界の特徴は根本的に変化した。

唯物論者のマルクスが人間の力を信じ、社会変革のために闘った偉大な人物であることは全世界の進歩的人民のすべてが認めるところであろう。そしてチュチェ思想はこの人間の力を特別に強調して、哲学的原理としたのである。

この物質世界で人間は、他のあらゆる物質的存在を支配する主人の地位にある唯一の存在である。無生命物質の場合、それぞれの物質的存在の占める地位における差異は認めにくい。もちろん無生命物質の世界でも、結合水準の高い物質は結合水準の低い物質よりも能動性が強く、したがって結合水準の高い物質と結合水準の低い物質の間には一定の従属関係があるものと仮定することができる。しかし、無生命物質の世界においては、いまだに結合水準の高い物質と低い物質の差がさほど大きいものではなく、したがって特殊な地位の物質的存在を認める必要がない。機械的な運動、物理的な運動、化学的な運動で、それぞれ物質の性質が運動におよぼす影響は異なるが、ここでは主動的なものと受動的なものとを見分けるのは困難であり、また、そのような必要もあまりない。

しかし、生物界の運動においては、生物有機体とその生活環境の間には特殊な関係のあることを認めることができる。生物有機体とその生活環境の間で主動的なものは生物有機体である。生物有機体は自己の生存と繁殖のために生活環境を能動的に利用する。こういった点で生命物質は物質の世界で特殊な地位を占めるといえる。だからといって、動植物は生活環境を支配する主人の地位にあるとはいえない。動植物には生活環境を自己の要求に即して改造する創造的能力がなく、したがってそれらは終局には生活環境の変化に服従せざるをえなくなる。

もっとも発達した動物の場合ですら、その運動を自分の要求する方向に導くことができず、自然の環境に順応して自分を変化させざるをえないのである。自然環境の変化に順応できない動物は滅亡する。地球上に存在するあらゆる動植物は、自然環境の許す限りにおいてのみ、その存在を保つことができ、やがて自然環境がその存在に適さなくなると、滅亡せざるをえない運命に置かれている。

この意味で動植物は世界で主人の地位を占めることができず、自然環境に従属する存在なのである。これに反して、人間は周囲の世界のあらゆる物質的存在を自己の要求に服従させようとする。人間と周囲の世界の関係で主動的なのは人間である。人間は周囲の環境の束縛から脱け出て、その存在の独自性を保つことのできる唯一の存在であり、その運動を自分の要求する方向に意識的に導くことのできる運命の主人である。それゆえに人間は世界を支配する主人の地位を占めるのである。

しかし、人間が世界において主人の地位にあるという意味は、人間が世界の運動変化の過程を完全に意のままにできることを意味するものではない。物質世界は果てしない。人間の創造力がおよんでいる範囲はいまそれほど広くはない。

だが人間は物質世界の運動法則を認識し、物質の世界を自己の要求に即して改造することによって、限りない発展の道を歩むことができる。周囲の世界は人間の運命に大きな影響をおよぼしはするが、人間は創造能力の成長につれて周囲の環境から受ける束縛からいっそう脱け出ることになる。世界を支配する人間の力は果てしなく拡大することができる。だから人間は世界において主人の地位を占めているといえるのである。

現在、たしかに私たち人類には、自然と社会に隷属している面、まだ主人としてふるまえないでいる面があり、当面解決不可能なことや未知な領域も数多く残されている。

だからといって私たちは、人間がまだ世界や自己の運命にとって無力な存在であるというマイナス面を主要な側面として人間を規定することが正しいであろうか。反対に、人間が社会的歴史的発展のなかで獲得した、人間だけが所有している自主性と創造性を重視し、人間だけが世界を認識し変革して人間に役立だつようにつくりかえうる唯一の存在であるという面に注目し、この側面を主要な側面として、人間こそが世界と自分自身の運命の主人であり、世界を改造し、自己の運命を切り開くことのできる唯一の社会的存在だと規定することが正しいであろうか。前者のように人間のマイナスの面をとらえて規定する立場は、敗北と不幸に盲従する立場であって、搾取階級を喜ばせる思想である。また、何よりも人間をマイナスの面でとらえるということは、結局は人間を他の動物と同じ水準でとらえることなのである。これに対し後者の立場は、革命の勝利と人民の幸福を実現する労働者階級を先頭とする勤労人民大衆の立場であり、自然と社会を自力で変革し、人間の真の倖せな社会を実現しようとする立場である。つまり、この立場こそ、何よりも人間が他の動物と本質的に異なっている点で人間を把握するもっとも正しい科学的立場なのである。

いかに人間が現在自分をとりまく環境や条件によって制約されようとも、また短期的、局部的に人間が不幸な境遇にあろうとも、人間こそが世界を変革する唯一の存在なのである。私たちはつねに人間の主動的な役割を高める立場からすべてのものに対処しなければならない。

金日成主席は、自然と社会の主人は人間であり、自然と社会は人間によって改造されるという、人間と世界との関係についての新しい徹底した見解を打ち出し、人民大衆が自己の運命の主人、歴史の主人として登場した現時代の要請に応えたのである。

世界の主人の地位にある特殊な物質的存在である人間が発生した結果、世界は新しい特徴をもつことになったのは何故であろうか。それは人間の発生とともに、長い間盲目的で必然的な運動が支配していた世界に、目的意識的に自主的に運動する新しい物質的存在が生まれ、新しい運動体系の社会が出現することになったからである。人間社会の出現によって、物質の世界は自然と社会の二つの部分に分かれ、社会の発展が物質世界の発展を規定する決定的な要因となった。そして、もはや私たちは社会を抜きにしては物質世界の本質的特徴について語ることはできなくなったのである。それゆえ物質世界というカテゴリーは自然だけではなく社会も包括するが、物質世界における社会の特殊な地位、主導的な地位を抜きにしては世界を語ることが今日ではできなくなった。

このように、今日の物質世界は人間が主人の地位を占め、その支配圏を絶えず拡大して行く世界である。

人間と世界の関係問題は世界観の根本問題である。現在、人間は物質発展の最高の産物として物質世界発展の高さを代表し、その発展方向と推進力を代表している。それゆえ世界における人間の地位と役割を解明することなしには、世界の真の姿を明らかにすることはできない。人間は世界で主人の地位にあって、世界を改造し発展させるうえ

で決定的な役割を果たしている。世界における人間の地位と役割は、人間の発展と相まって不断に高まっている。今後、世界の主人としての人間の地位と役割が高まるにつれ、人間を中心とする世界の様相はいよいよはっきりしたものになり、目的意識をもった人間が、目的意識をもたない物質世界を次第に改造し、人間と自然との調和のとれた美しい世界が、人間を中心として実現されるであろう。その時になれば、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理は、世界の変化発展を規定する根本原理として完全な生命力を発揮することになるであろう。

以上の考察によって私たちは、世界に対する人間の関係でもっとも本質的な問題、すなわち世界において人間が主動的な地位を占めるのか、それとも人間は人間以外の何ものかに隷属しているのか、という問題の正しい解答を得ることができたであろう。外部世界に盲目的に順応することなく、世界を自分の意志と要求に即して目的意識的に改造し、科学と技術を発展させているのは、この世界においてただ人間のみなのである。人間こそはまさに世界の主人、自己の運命の主人としての自覚をもって自主的に生活し、創造的に活動できる世界で唯一の存在なのである。

このような意義をもつチュチェ思想の哲学的原理にたいして、影山氏は哲学的範疇としての物質の意義を強調するだけである。すなわち影山氏は岩崎氏の見解を引用して、物質の哲学的概念は唯物論哲学のもっとも基礎的な概念であり、唯物論哲学の全展開にたいする根本原理として、唯物論哲学を貫徹するものである、という。チュチェ思想も物質の哲学的概念が唯物論学のもっとも基礎的な概念であることは当然のこととして認める。なぜならチュチェ思想は弁証法的唯物論を全面的に継承するものだからである。そして唯物論の観念論にたいする勝利の基礎のうえにチュチェ思想は立脚している。

改めて指摘するまでもなくマルクスの世界観をも含めて、それ以前の哲学の根本問題は、思惟と存在、意識と物質に関する問題であり、世界が根源的に何から成り立っているのか、物質から成り立っているのか、それとも意識から成り立っているのか、という問題であった。この問題をめぐって多くの見解と論争がみられたが、それは結局は観念論と唯物論の二大陣営に分けられた。そしてこの二つの陣営の闘争において唯物論は勝利したのである。この勝利なくしては最も発展した物質である人間中心の哲学は誕生しなかったであろう。

それ故このような重要な意義をもつ観念論と唯物論の闘争における唯物論の勝利は、物質発展の最高の産物である人間中心の哲学であるチュチェ思想形成のための不可欠の前提だったのである。

物質と意識の相互関係の問題のマルクス主義による解決ならびにマルクスの理論的諸業績は、それが哲学史上の輝かしい成果であり、歴史的にみて全く正当なことであったが、しかしそれはあくまでも哲学における根本的ではあったがやはり一つの前提的問題の解明に止まっていたといわなければならない。なぜならマルクスは、後述するように、もっとも発達した物質である人間そのものの本質を規定し、人間と世界の関係についての哲学の根本問題を提起して、それに対する解答を与えてはいなかったからである。すなわち唯物論の勝利によって観念論が否定されたということは、世界が根源的に観念からではなく物質から成り立っているという正しい見解を確立したことであり、この結果、唯物論の勝利は、哲学の根本問題、すなわち物質発展の最高の段階である人間の世界において占める地位と役割に関する問題を解明するための前提となったのではあるが、しかしこの根本問題そのものを提起しそれに解答を与えたということはできないのである。

チュチェ思想は、マルクス主義をも含めて、これまでの哲学のもつこうした限界を克服し、世界における人間の地

位と役割の問題を哲学の根本問題として新しく提起し、歴史上はじめてこの問題を解明したのである。そしてこの点にこそチュチェ思想の特質がある。

労働者階級の革命思想の偉大さと独創性は、その根本原理によって決定されるのであり、チュチェ思想の独創性もまたその根本原理の独創性に由来する。

チュチェ思想の根本原理は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという原理である。そしてマルクス主義とチュチェ思想の根本的差異は、チュチェ思想がこの哲学的原理を特別に強調しこの根本原理のうえにたってその哲学体系を確立していることである。

以上でみた如くチュチェ思想は、唯物論と観念論との闘争において勝利した唯物論の成果を全面的に継承しているとともに、労働者階級の立場に立ち、ともに共産主義の実現を目ざし、ともに唯物弁証法に依拠しているという点でマルクス・レーニン主義と同一である。

しかし人間の現実生活は時代とともに変化発展するが客観化された思想・理論は書物のなかに固定化されている。そのため新しい時代の要請に応えることができなくなるのは当然である。したがって過去の学説を、それがいかに優れてていても、教条として固定的に受け入れることは誤まりである。影山氏のようにただ物質の哲学的範疇を根本原理としていないから根本原理をすり換えだとの批判は、批判とよぶのに値しないといわざるを得ないのである。

人間の事大主義思想は権力や金に対してだけあるのではなく、思想的・理論的富に対しても認められる。思想・理論を歴史的に把握するために古典を読むことも必要であり、また歴史的に蓄積した思想的・理論的富を継承発展させるために、昔の人が創造した思想・理論を研究することも必要である。しかし一部の人たちのように、昔の人々の書

いた本を神聖化し教条化しようとする傾向は誤りである。

したがって私たちは、マルクスの偉大さを認めるとともに、否、その偉大さを認めるからこそマルクス主義を教条化してはならないのである。チュチェ思想は影山氏がいうようにマルクス・レーニン主義を低め、古くなったと無視するものでない。

このようなチュチェ思想の哲学的原理は「われわれがはじめて発見したものではありません。マルクス・レーニン主義者であれば、だれでもこう考えています。ただわたしは、こうした思想を特別に強調しただけです」(前出)と主席が述べているように、マルクス主義には全くなかった思想の強調ではない。ただ主席は、「こうした思想」をチュチェ哲学の根本原理として特別に強調し、このことによって、チュチェ思想というマルクス・レーニン主義を継承したうえでの独創的な思想を創始、確立したのである。

金日成主席が、「チュチェ思想は、世界における人間の地位と役割を科学的に解明することによって、自然と社会にたいするもっとも正しい見解を与え、世界を認識し改造する強力な武器を与えます」(「朝鮮労働党創立三〇周年に際して」一九七五年一〇月九日)と述べているように、チュチェ思想は、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理にもとづいて現時代における正しい世界観を確立したのである。そしてこの人間が世界で占める地位と役割をもっとも深く、もっとも正しく規定したチュチェの哲学的原理は、歴史上はじめて人間そのものの本質を正しく全面的に規定したチュチェの人間観と不可分に結びついている。チュチェの哲学的原理は、チュチェの人間観によって裏付けられており、チュチェの人間観なくしては、チュチェの哲学的原理も成立しえないのである。そしてまたチュチェの哲学的原理を基礎としてすべての革命理論が展開されているのである。

主席は次のように述べている。

「人間は世界でもっとも進んだ有力な存在です。自然と社会を改造するのも人間であり、科学と技術を発達させるのも人間です。それゆえに人間は世界を支配する主人となり、すべてを決定する要因となるのです。われわれは、チュチェ思想のこのような哲学的原理にもとづき、勤労人民大衆を中心にすえて、すべての哲学理論を展開しています。」（同上）

人間は自己の要求と志向に即して世界を変革、改造しながら生きて行く存在なのか。あるいは、外部世界が決定的な力をもっていて、人間は外部世界に隷属して生きる存在なのか。チュチェの哲学的原理はこの問題に対する決定的な解答であり、それゆえ哲学の根本問題への解答である。そして、マルクスもエンゲルスもレーニンも、すべて偉大なる革命家の歩んだ途は、ほかならぬチュチェ思想の哲学的原理の実践だったのである。

三　人間の本質についての影山氏の批判とその検討

影山論文で問題にしなければならない第三の点は、チュチェ思想の人間観批判である。

氏はこの点について以下のように述べている。

「チュチェ思想では、人間を世界の主人にすえる人間中心の世界観が確立されたとされていることは、われわれが以上においてみたところである。

……

それでは、人間はそもそもどのようにとらえられているか。『主体思想について』では、『人間は自主性と創造性

および意識性をもった社会的存在である』という金日成の命題に依拠して、人間はこのような存在であるからこそ、世界の主人として特別な地位と役割をになうとされる。そして『自主性、創造性、意識性は、社会的歴史的に形成され発展する人間の社会的属性である』とし、創造性と自主性は人間の本質的特徴をなすとともに、同時に、なかんずく、意識性は、それによって『社会的存在である人間の自主性、創造性が裏打ちされ、その合目的な認識活動と実践活動が保障される』点で、基礎的であるとされる。だからして、『自主性、創造性、意識性によって人間は世界でもっともすぐれた存在』であり、この点で、人間は動物から根本的に区別されることになる。

チュチェ思想において端的にくりかえしたてられるこの『人間』規定については、第一に、それがそのままでは抽象的な人間規定であり、超歴史的であること、第二に、労働を基礎にした規定でないこと、第三に、社会諸関係の総体の視点からの規定でないこと、階級性を欠いた規定であること、などが批判点としてまず指摘されうる。」（一七八ページ）

そして氏は、「盲従主義者たちの思想がいかに粗雑で軽薄なものであるかは、次のような発言をみただけでも歴然たるものである。すなわち、マルクス主義では、『人間を、高等な動物、平均的な生物学的存在の水準に、あるいはさまざまな物質存在とあまりかわらないものに落としこめ』ている（「日本キムイルソン主義研究会第三回全国委員会における基調報告」）」（一七一ページ）と批判する。

影山氏は右で述べているようにチュチェ思想の人間の本質規定は、第一に抽象的だと批判している。しかしそもそも本質規定というのは個々の具体的人間に共通する本質を規定するのだから抽象的であるのは当然であり、抽象的でなければならないのである。問題は正しく抽象されているかどうかにある。また超歴史的だという批判についても、

人間の本質が歴史的に一貫してもつところの人間の本質が定義されているのだから、これまた当然のことである。

第三の労働を基礎としていないという点や第四の階級性を欠いた規定という批判点も、労働は創造という規定に含まれており、階級性がないという点についても人間の本質規定が無階級社会でも階級社会でも共通に成立する規定であることからして当然のことなのである。

また影山氏はチュチェ思想が人間を物質にまで低めていると述べているが、それこそ、まさに逆に人間の価値を限りなく高めているのがチュチェ思想なのである。そしてこのことは金日成書記の「チュチェ思想について」においても明確に示されている。

ところでチュチェ思想は人間中心の哲学であるが、このことからチュチェ思想が、一種の観念論であるかのように速断する人がいる。影山氏の批判もこの点に関連している。しかし、これは全くの誤解である。チュチェ思想は観念論でないばかりでなく、前項でみたようにマルクス主義の唯物弁証法的世界観を継承し、これを人間中心の立場から独創的に、より深化発展させたところの最も徹底した唯物論的世界観である。

かつて影山氏の指摘したように、チュチェ思想は人間中心の哲学であり、マルクス主義は物質中心の哲学であるという理解が一部にみられたが、このような解釈は正しくない。この点では影山氏の批判は当っている。マルクス主義は観念論ではなく唯物論に依拠しているが、しかし物質中心の哲学ではなく、勤労人民の幸福を何よりも願った偉大な人間解放の思想である。そしてチュチェ思想もまたマルクス主義と同様に唯物論に依拠しているが、とくに物質発展の最高の産物としての人間の本質を社会的属性として自主性、創造性、意識性であると規定し、人間（勤労人民大衆）はみずからの力によってみずからの幸福を実現しなければならないとする人間中心の思想である。したがってチ

ュチェ思想はマルクス・レーニン主義とともに唯物論をその共通の基盤としているところの人間中心の思想なのである。

この世界における最も根源的、永遠的、かつ普遍的なものは何であろうか。それは世界が物質から成り立っており、すべての物質は対立物の統一であり、絶えず変化・発展しているということである。そしてこの物質発展のもっとも価値ある存在が実に人間である。

私たち人間は、まず、自分自身が何であるか、つまり人間とは、そもそも、その本質において何であるか、を理解しなければならないのではないだろうか。なぜならあらゆる学問の基礎、出発点は人間そのものだからであり、人間の倖せも自己自身の正しい認識にかかっているからである。ところが「人間とは何であるか」という問ほど、難しい問はない。

そこで、ではマルクスは人間の本質をどうみたであろうか。

マルクスは人間は労働する動物であるという点、およびフォイエルバッハのテーゼで述べているように、人間の本質は社会関係の総和（総体）であるという点に、他の動物と決定的に異なる人間の本質を認めた。

マルクスとエンゲルスが新世界観を形成するにあたって第一に強調したことは、衣・食・住に対する欲望充足手段の生産、すなわち物質的生活そのものの生産であった。人間は理性とか宗教とか、その他勝手なものによって動物から区別することができるが、しかし人間自身は、彼らが生活資料を生産しはじめるや、自分を動物から区別しはじめた、というのがマルクスの見解であった。

たしかに労働は人間固有の営みであり、人間以外に労働（生産）する動物は存在しない。しかし、人間は自然に働

きかけて労働することを基本としながら、同時に文化面においても、精神生活面においても、人間自身の改造である教育面においても、人間はみずからを発展させてきた。このようにみるとき、人間とは単に労働する動物であると規定するのは不十分であることがわかる。

またマルクスによる人間の本質は社会関係の総体（アンサンブル）であるという有名な規定についてもそれは、人間が社会関係を結び、社会の変化とともにその性質を変化発展させるとみる見解であり、人間の本質を観念的、宗教的に把えて、神秘化したり固定不変とする誤った考えを克服するものとして大きな意義をもつものではあったが、しかしこのマルクスの規定も人間の本質的規定そのものではなく不十分である。なぜなら社会関係の総体によって人間の本質が規定されるというだけでは人間の本質そのものの説明とはならないからである。

人間性の擁護は、マルクスがその活動の初期から注目した重要な問題であった。そしてマルクスは、当時の時代的制約の下で神秘主義と宿命論で資本の支配を神聖化し、その永遠性を説教する観念論と形而上学を打破し、資本主義の没落と社会主義の勝利の必然性を論証する科学的な世界観を確立するのに力を注いだ。このためマルクスは、主として人間生活のなかで決定的意義をもつものとして物質的生産と経済関係を重視した。このためマルクスは人間の本質を正しく規定するまでには到らなかったのであろう。

世界の本質が物質であり、世界が物質で統一され、それ自体の法則によって変化発展するという唯物弁証法的見解は、世界に対する科学的な見解を確立するうえで一つの画期であった。しかし、世界の主人は人間であり、世界を改造し変化する力も人間のみがもつという、決定的に人間を信じ、人間の限りない発展を信じ、人類の未来を楽観し、確信する思想は、かつて人類の思想史上に存在しなかったが、いまや私たちは、このような主体的な思想を持つべき

時代に生きているのである。

世界は人間によって支配されるのである。なぜなら現実の世界は人間とそれをとりまく自然から成り立っているが、自然は人間と同等の地位にあるのではない。人間は自然の主人である。

世界の主人は人間であり、世界は人間によって支配されるということが、人間との関係において明らかにされた世界の姿であり、世界は人間によって改造され、発展する。

世界で創造的能力をもつ唯一の存在は人間のみである。人間は創造的能力をもって世界を不断に改造し、発展させる。人間の創造的闘争によって自然は人間の要求どおりに改造され、社会は新しい進歩的なものに変革されて行く。世界の発展方向を規定し、世界の改造を推し進めるのも人間である。世界は人間の創造的活動によって人間に有益な方向へと間断なく改造され、発展して行くということが、人間との関係において明らかにされた世界の運動発展の法則である。

今や私たちはチュチェ思想の出現によって、世界が物質から成り立ち、物質の運動によって変化発展するという世界の一般的特徴が明らかにされた条件のもとで、自然と社会を支配する主人は誰であり、それらを改造する力はどこにあるかという問題に科学的な解答を与えられたのである。

世界には数多くの物質が存在しているが、実は、結論的にいえば人間だけがあらゆるものの主人であり、すべてを決定する力をもっているのである。何故であろうか。それは人間だけが他のすべての生物と決定的に区別される性質をもっているからである。

ではそれはどんな性質か。結論的にいえばそれが人間の本質としての自主性、創造性、意識性である。この三つの

性質は社会的および歴史的に形成され発展する人間の本質なのである。世界のなかで社会的関係を結んで目的意識的に能動的に世界に働きかけて生活し活動する存在はひとり人間だけである。自主性、創造性、意識性は社会的存在である人間に固有な本質的性格であり、人間の本質的特性を統一的に形成している三大属性である。そして人間が自然と社会に対して自主性を確立する過程は、人間の創造性の発展過程と照応している。人間だけがこの世界のなかで世界に対して能動的に働きかけることのできる創造的能力の所有者である。だから人間は世界に対して自主性をもつことができるのである。

では人間と動物の本質的な相異は何であろうか。それはまず第一に人間が自主性をもっていることである。

自主性とは、世界と自己の運命の主人として自主的に生きようとする人間の属性である。人間から自主性を取り去ったら、最早、人間ではない。

自主性を無視することは、人間そのものを無視することとなんら変わりがないのである。他人に抑圧され従属して生きることは、人間の本性に反する。人間であるということは、すなわち自主性をもつ存在であるということである。他の動物のように自然に盲目的に順応しているだけであったり、また他人に従属して生きているなら、それは最早人間らしい真に解放された人間ということはできない。自然と社会と自己の運命に対して自主的に生きようとすることが人間の第一の特質であって、人類の初期の自主性がどのように低いものであり、弱いものであっても、人間である以上は自主的に生きようとするのである。

人間の自主性は人間が長い進化過程で形成し発展させた特殊な肉体的器官ときりはなして考えることはできない。人間は発達した有機体である。このことから、人間は他の生物的物質のもつことのできない特殊な機能である思惟

機能と労働機能をもち、したがって自主性をもっている。しかし、だからといって、人間の自主性もその有機体としての進化の結果としてみるのは正しくない。

自主性は社会的存在としての人間のもつ属性であり、したがってそれを生命物質の自然的生物的属性の発展完成とみてはならず、人間の自主性を生命物質一般の自然的属性が発展完成されたものとみる見解は、本質において進化論的考察方法で誤りである。もちろん人間が長いあいだの進化発展の産物であるということは、すでに久しい以前に科学によって確証された事実であり、それ自体を否定することはできない。近代的進化論はイギリスのチャールス・ダーウィン（一八〇九～一八八二年）によって発表されたもので、彼の『種の起源』は一八五九年に刊行された。進化論は人間を他の生物から本質的に区別し、人間に特別な宗教的、形而上学的意味を与えていた思想を根底からくつがえした。ダーウィンによれば、地球上の生物は絶えざる生存競争によって同種の生物に属している多少の変異のある個体のうち生存に最も適するものが生き残るという自然淘汰が行われ、これが累積して種の変化が起るのである。生物進化の研究にはまだ問題が残されているのであるが、しかし動植物の新しい種の出現は宗教の教えるように、神の創造的行為によってではなく、生存闘争と自然淘汰によるものであり、人類は類人猿にその起源をもっていることをほぼ科学的実証的に解明したダーウィンの功績は大きい。

このように進化論それ自体は正しい。しかし人間は進化の産物ではあるが自主性は進化の産物ではない。自主性は社会的産物である。自主性は自然ではなく、社会が人間にあたえる属性であり、自然界からゆずりうけたものではなく、社会的歴史的に形成され、発展してきた属性である。自然が人間に自然的生物的属性をあたえたとすれば、社会は人間に社会的属性をあたえたのである。

人間の自主性は、社会的産物であって、生物学的進化の法則によって生まれたものではないが、しかし、それは人間の進化の結果として得られた肉体と関係はないのかというと、そうではない。人間は進化の産物として肉体的諸器官においてすぐれた生命体となり、そのような動物としての人間が社会生活を営むことによって自主性を獲得したのである。だから進化論的な人間の発展は、社会的存在としての人間となるための前提である。しかしだからといって、進化論的結果として人間の自主性が生まれたのではない。

このように人間は単なる物質的存在ではなく、また単なる動物的段階の生命体でもない。

人間は客観世界に従属し順応する他の生命物質とは異なって、世界を自分の意志と要求に即して支配、攻造、変革していく存在である。人間の属性である自主性を社会的属性とみるならば、結果的には社会的存在である人間と生命物質一般が、根本的に異なる一線をあいまいにし、世界の支配者、改造者としての人間のしめる地位と役割を、生命物質一般の水準に低めることになるのである。

人間の創造的活動は、人間の要求を充足させ、人間の幸せに役立つようになされなければならない。創造的活動の方向と目標を規定するのは人間の自主性である。人間の創造的能力がいかに大きくても、自主的な思想・意識の発展水準が低いときには、発展方向を正しく規定することも、発展の要求にふさわしく創造的能力を行使することもできない。人間の創造的能力を何のために行使し、どのような方向に役立てるかを規定するものは、その人の自主的な思想意識である。

この意味で人間の創造性は自主性に従属している。しかし人間の自主性はあくまでも人間の創造的活動の目的と方向を規定する要因であって、それ自体が創造的活動を行うのではない。創造的活動を行なう直接の要因はあくまでも

創造的能力である。世界における人間の役割との関連においては創造性が問題となるのである。

世界における人間の地位について考える場合は、人間がいかなる力に依拠しているかということよりも、人間の自主的な要求がどれほど実現しているかが問題となり、世界における人間の役割について考える場合には、人間の創造的能力の行使の結果が人間の自主性の実現にどのように役立っているかという価値判断よりは、ただ実際に設定された創造の目的がどの程度実現しているかという技術的な使用価値的な成果が重要な意義をもつことになる。

しかし世界における人間の地位と役割が一つの目的で結びついているように、人間の自主性と創造性も一つの目的で結びついている。すなわち世界における人間の真の倖せの確立、人間の限りない発展という目的である。

自主的に生きようとする人間の要求が実現された程度に応じて人間の世界の主人としての地位は次第に確立され、世界を改造するうえで人間の創造的な力が作用する程度が高まる度合に応じて世界の改造者としての人間の役割は向上する。こうして世界における人間の地位が高まるにつれ、人間の自主性を実現する条件と可能性は拡大し、人間の支配圏は拡大する。

人間の肉体が自主性と創造性を裏うちする物質的要因であるのに対し、人間の意識は自主性と創造性を裏うちする精神的要因である。

自主性は意識的に提起される人間の自主的要求であり、創造性は意識的に作用する人間の創造力である。意識性をはなれては自主性と創造性はありえず、人間の自主的で創造的な活動もありえない。

意識は社会的存在としての人間が自己の要求を自己の根本利益に即して目的意識的に提起し、自己の力を合理的に行使するよう調節統制する働きをする。

次に人間の本質を形成する創造性とは何であろうか。

人間から創造性を取り去るなら、ただのサルである。

創造性は自主性と同じく社会的存在である。人間の本質的特徴を形成している。

創造性は目的意識的に世界を改造し、自己の将来を切り拓いて行く社会的人間の属性である。人間は創造性をもっているからこそ、古いものを変革し、新しいものを創造しながら、自然と社会を人間自身にとって有益なものに改造するのである。

自主性は世界の主人としての人間の地位を表現する。これに対し、創造性は世界の改造者としての人間の役割を表現する。

人間の創造的能力は、自然に本能的、受動的に順応して生きる動物の生活能力とは本質的に異なる。動物はあるがままの自然のなかで、みずからも自然の一部として自己の生存を維持し、進化はするが、自然を改造する能力はない。しかし人間は自然と社会を人間に奉仕し役立つようにする。古いものを変革し、新しいものを創造し、自然と社会を自己に有益なものに改造し、自分自身をも世界の改造者として発展させるのが人間の創造性である。自主性のない社会的人間が存在しないように、創造性のない社会的人間も存在しない。

世界の改造で人間の創造的役割を規定する主要な要因は人間の創造的能力である。人間は自分の創造的能力の発展水準に応じて創造的活動を行うことができる。創造的活動は客観的世界との相互関係のなかで行われるので、客観的条件の良し悪しが人間の創造的活動に一定の影響を及ぼすのはもちろんである。しかしそれはあくまでも客観的条件であって、創造的活動の推進力は人間の創造的能力である。人間の創造的活動では、人間自身の創造的能力が決定的

意義をもち、客観的条件は第二義的意義をもつにすぎない。

では人間の本質を形成する意識性とは何であろうか。

人間のすべての営みはみな人間の意識と結びついており、周囲の世界に対する人間の関係はすべて人間の意識を通して結ばれている。したがって、意識の問題が極めて重要な位置を占めるのは当然である。

意識の問題は、長い間、人々によって論議されてきた最も重要な哲学上の問題の一つである。しかし、従来の哲学では、意識は客観的実在と切り離されて、観念的に独立して存在する神秘的、形而上学的なものとして理解されるか、または逆に物質によって規定される副次的、二次的なものとして位置づけられていた。しかし意識を独立の客観的実体とみることも、逆に物質の単なる反映とみることもともに誤りである。

人間は脳髄をもっている。脳髄は、動物においても人間においても、動物や人間という生命体と環境との相互作用を統一的に調節統制する器官である。人間の脳髄は、人間の生命活動全般を統一的に規制する任務を担っているので、その機能のなかには動物にもみられる低級な生命活動を規制する機能もあり、人間にのみ固有な生命活動を規制する機能もある。動物にみられる生命活動を規制する機能は脳髄の本能的機能である。これに対して人間にのみ固有な生命活動を規制する意識は、社会的人間にのみ固有な自主的・創造的機能である。つまり、人間の意識作用は、人間の自主的で創造的な活動を保障し、規制する脳髄の機能である。動物の本能的心理は動物をして環境に適応し、合目的的に生きるように本能的に作用するが、人間の意識は、人間をして自主的な要求に合うように行動目標をたて、客観的条件と自己の力の準備程度に合わせて合理的に行動できるように調節するばかりでなく、目標達成へと促す意志力としても作用する。このように、意識は自己の自主的な要求に合わせて創造的に活動しようとする人間の頭脳の

働きであり、人間の活動に目的意識性を付与するところに、その本質的な役割がある。

このように、意識の本質と役割とを人間の本質的属性との関係から解明し、意識の機能を人間の本質的属性としてとらえるのが、正しい意識についての考え方である。

以上で簡単に述べたようにチュチェ思想における人間の本質規定はもっとも包括的な正しい規定であり、人間の三大属性は社会的・歴史的に形成され発展するものではあるが、しかし時代を超え、民族を超え、階級を超えて、地上に生存したすべての人間に妥当する規定である。それは影山氏の批判とは逆に、これまでの人間観のなかでの人間に対するもっとも正しい本質規定である。